様式１　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（表面）

**平成２８年度　東北大学等との連携による震災復興支援・災害科学研究推進活動サポート経費　要求書**

部局等名：

|  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| **事業名****（要求事項）** | 震災復興と失われたコミュニティの記憶の保存と再構築のサポート | 新規 | 継続 | 開始年度 |
|  | ○ | 平成24年度 |
| **代表者** | 所属部等局名 | 職名等 | 氏　名 |
| 国際文化学研究科 | 准教授 | 梅屋　潔（ウメヤ　キヨシ） |
| **組　織** | 氏　　名 | 所属研究機関・部局・職 | 役　割　分　担 |
| 岡田 浩樹高倉 浩樹政岡 伸洋加藤 幸治庄司 幸男伊藤 泰弘小谷 竜介 | 神戸大学・国際文化学研究科・教授東北大学・東北アジア研究センター・教授東北学院大学・文学部・教授東北学院大学・文学部・准教授NPO法人全国生涯学習まちづくり協会大曲獅子舞保存会会長東北歴史民俗博物館 | 代表補佐・他機関・行政との連携文化人類学、データベース連携民俗学、現地監督・指導民俗学、現地監督・指導市民コーディネーター（気仙沼市）市民コーディネーター（東松島市）民俗学、資料の整理・保存 |
| **要求理由（概要・目的）** |
| １．概要：震災から5年が経過し、被災地ではある程度の復興が進むと共に、震災で失われたコミュニティの記憶の保存、それを生かしたコミュニティの再構築の動きが現れている。これまで本プロジェクトでは東北大学等と神戸大学の学生（院生含む）、地域住民、自治体などと協力しながら共同フィールドワークを行い、その作業を通じた相互作用から大震災のダメージを乗り切る処方箋を検討してきた。本プロジェクトは地域住民や現地大学と協力しつつ、震災前のコミュニティの記憶、無形文化財などテキスト化されていない資料をアーカイブやジオラマなどで残すプロセスを通じ、住民の主体的活動をコミュニティ再構築という復興の次の段階に向かうことをサポートすることにある。これは被災地に阪神・淡路大震災からの復興との対比からより立体的に問題の所在と克服の処方箋を共同開発するとともに、今後の災害が予測される地域に対する両被災地からの教訓として共同発信する手法のひとつとして位置づけられる。２．目的：2015年度までに作り上げた現地とのネットワークと、そのネットワークを通じてともに考える共同の場を基盤に、「記憶の継承」による被災地コミュニティの再構築の可視化、語りの資料のアーカイブ化を目的とする。これにより、それぞれのインフォーマントから得られた個々の記憶がコミュニティの記憶として共有されていくことになる。また、アーカイブの拡充のために事業を継続し、新たに関与する学生および大学関係者のリクルートを通じて人材養成を継続する。5年の節目を迎え、問題の本質が明確になってきた東日本大震災の当事者との相互交流を通じて、災害研究としても活用しうる資料を残し、復興における「コミュニティの記憶」の重要性の議論の深化を最終的な目的とする。 |
| **計　画　・　方　法** |
| 神戸大学側、東北側の学生双方に、基本的な方法は、インタビュー資料の書き起こしとアーカイブ作成という共同作業を行うことである。またその成果を神戸大学工学研究科の協力を得て、ジオラマなどを作成し、インタビュー資料とリンクさせることにより、記憶の保存と可視化、共有を図る。また東日本大震災を比較参照点として「記憶の継承」とコミュニティの再構築いついて阪神・淡路大震災の復興を再考することとしたい。東北側の共同調査者を帯同し阪神淡路大震災の被災地の巡検およびワークショップを重点化し、東北側・神戸側が協力し、大学院生・学部学生を帯同して兵庫県住民の状況の聞き取りを行う事業を充実する。東松島市にかんしては、先方から主体的に提案された震災前のジオラマ作成という事業の可能性を追求することで、当方の関連分野に関する人脈や知見を提供しつつ、震災前のコミュニティのありかたについての知見を蓄積する。加えて宮城県のデータベース作成事業と連携し、成果を共有し、その利用者のコメントを収集してデータベースにフィードバックする回路を開く。事業費の用途は神戸大学および宮城側教員の調査出張旅費と宮城、神戸双方の現地調査の学生雇用、協力者への謝金であり、その他の部分（例えば会場費や印刷費）については別途調達の予定である。なお、ジオラマ作成については自治体予算を申請予定である（現在は未申請）。 |
| **期待される具体的な効果･今後の展開（継続の場合は、成果等も含め詳細に記載すること）** |
| １．これまでの成果：①論文・発表などの形での事業成果報告：東北大学との共同研究、および事業の成果として本事業の成果は国際学会などで報告されている（詳細については報告書を参照）②研究関係にとどまらない復興にかかわる人材の養成：事業に参加した学生で、大学院に進学し、被災地で復興を志して就職したものが複数いるだけでなく、事業に参加した市民のその後の活発な復興関係への活動を促す結果となっている。③自治体などとの協力体制の構築：この事業のスピンアウトとして、東松島市からはジオラマ作成の依頼が寄せられ、気仙沼市教育委員会からは、「特徴ある街づくり」のための助言を求められるなど、地方自治体とも有機的な協力関係が構築されている（前者には可能なリソースの紹介と支援を、後者には具体的に国立歴史民俗博物館と協力して文化庁の調査事業に参画することで継続的にかかわっていく予定）。なによりも、被災地住民が「主体」的に神戸大学および東北大学等の大学・研究機関を利用しようという契機であることはこの事業の具体的効果として高く評価できると自負する。２．今後の展開：上にのべた地方自治体との協力関係を維持しつつ、「雪だるま式」にネットワークを拡大していく予定である。震災後5年の節目を迎え、東日本大震災の被災者の語り口に変化が表れている。復興のプロセスを目の当たりにするにつけ、東日本大震災の復興を見ることは、既知と考えていた阪神・淡路大震災の復興についての側面を再考する機能があることがよりはっきりわかってきた。この二つの震災について共同で考えていくこの事業は、認識の再編と焦点化の往復運動を繰り返すことで、人類にとって災害とは何か、それに直面したときに人間の社会がどのように対応していくのか、コミュニティ、政治制度、官僚制度、学術有識者などの関連アクターとしての性格と限界など一般的な議論に展開し、さらに、旧北淡町に典型的にみられる人口流出の現状や、今後東北の高台の復興住宅に起こるはずの高齢化問題、などを多角的に考えることで、過疎化・高齢化問題や限界集落問題、「村おさめ」問題にもつながっていく、コミュニティの形成と運営に関係する問題にも展開していくはずである（そのためにも地道な具体的な事実集めが第一に大切と認識している）。単に研究者だけではなく、研究者と市民が緊密に関係したこの事業の開かれた場としての性格は、事業開始以降時間をかけて「雪だるま式」に次第に形成されてきた議論のアリーナとしてそれ自体コミュニティとも呼んでいい性質をともなうようになってきており、きわめて有効なものとして機能すると考えられる。 |
| **経　費** | **使　用　内　訳** |
| 合　　計 | 旅費・謝金 | 事業費 | 消耗品費 | その他 |
| 800千円 | 800千円 | 0千円 | 0千円 | 0千円 |
| **使　用　内　訳　明　細** |
|  | 品　名 | 仕　様 | 単　価 | 数　量 |  |
| 旅費・謝金 | 旅費（神戸⇔宮城）謝金現地コーディネート録音書き起こし | 3泊4日1日8時間1日8時間1時間 | 90,000円6,000円8,000円12,000円 | 6101010 | **計** | 5400006000080000120000**800,000円** |
| 事業費 |  |  |  |  | **計** | **0円** |
| 消耗品費 |  |  |  |  | **計** | **0円** |
| その他 |  |  |  |  | **計** | **0円** |
| **他の事業等での配分状況の有無（現在申請中も含む）** | **有** |  | **無** |  |
| ※「有」の場合，下記項目を記入してください |
| 【国立大学協会】震災復興・日本再生支援事業 | 申請中 |  | 採択済 |  |
| 募集機関名：　　　　　事業名：　　　　　　　　　　 | 申請中 |  | 採択済 |  |